

弦齋/浪平の年譜

		村井 弦齋	小平 浪平
1841年			父：大沢惣八 誕生(旧家、栃木市城内町の旧家、3男坊)
1853年			母：小平チヨ 誕生(3男5女の末っ子)
1863年	文久3年	三河吉田藩(愛知県豊橋市)の武家の子(父：清、母：勢以の長男 本名は寛)として誕生。父も祖父も儒者&砲術指南役として藩に使え、特に漢学をよくした家柄だった。父の村井清(号は楽地)は著述家として『傍訓註釈 西洋千字文』など数冊の本を出版。甥は作曲家の呉泰次郎である。	
1867年	慶応4年	父清は江戸詰。祖父、母と共に上野近くの吉田藩江戸屋敷に移住。。戊辰戦争では幕軍で 奥羽越列藩同盟に参戦。	
1868年	明治元年	弦齋 祖父より漢籍の素読の教育を受ける。	
1869年	明治2年	父清は明治維新後、士族の商法(文具や小間物屋)で一家は貧窮の底。社会の身分の変動を目の当たりにしたことから「息子には漢学だけでなく洋学も早くから学ばせたい」と考えるようになる。	(日立鉱山の創始者：久原房之助 誕生)
1870年	明治3年	ロシア語の家庭教師をつけられたり、漢学の塾に入れられたりして、早期の英才教育を受ける。	大沢惣八(29歳、再婚) 小平家チヨ(18歳)に入婿
1871年	明治5年	祖父が亡くなる。苦しい家計を助けるために紙縫りづくりの内職を手伝う。	兄：儀平誕生
1873年	明治7年	1873年に東京外国語学校(現・東京外国語大学)が開校すると、入学資格が13歳以上にもかかわらず、12歳で受験・入学させられた。	浪平：誕生
		露語を専攻したのは 何れ日本はロシアと事を構える趨勢にあると予想し 仮想敵国である良く知る事が日本人の務めと考える。特別許可を貰って深夜12時まで勉強していた。	(東大電気の学友；渋沢元治誕生)
1878年	明治10年	父清は渋沢栄一の知遇を得て第一銀行勤務。生活は安定に向かう。また渋沢栄一の子息の家庭教師も勤めたほどの教養人であった。	

1881年	明治13年	<p>猛勉強で首席にもなったものの健康を害し、1881年に露語科を中退。うつ病傾向などの神経性の疾患を抱え、しばらく療養しながら経済、政治、商法、などの書籍を読み漁りって独学し、文学にも傾倒して行く。更に『楽水雑記』には史書、和歌、経典類からの抜粋のほか、「大日本乃諸国耕作地表」「米国金銀の産出」と言った実業的な表、統計資料も多く載せられており、弦斎の向学心が幅広い対象に向けられていたことが窺える。</p>	<p>合戦場の小学校淑慎学舎入学。(日産コンツェルン)の創始者:鮎川義介 誕生)</p>
1882年	明治15年	<p>病が癒えた後、実業を志し 新聞社の校正掛などを経た後、見聞を広めようと 旅行を兼ねた行商に出ようと企てる。6月に九重丸で横浜を発ち、函館、江差を廻るが 商売は上手くいかず、11月には仙台を経て福島まで戻ってきた。折しも福島事件の発生で、自由党员取締に躍起になっていた警察から風体を怪しまれた彼は「東京から来た煙草業者で 買い付けの為 最上に行く途中だ」と説明して難を逃れた。帰京のついでにと立ち寄った山形県楯岡(現村上市)の叔父の家で漢籍を教えることになり けっきょくおよそ一年間逗留することになった。</p>	<p>父及び隣家親類の老人より「四書五経」「史記」「文章規範」「佐傳」等素読学ぶ。</p>
1884年	明治17年	<p>東京に戻った弦斎は幼少からの学問に加え放浪生活で得た知識を文章を書いて しきりに各新聞社・雑誌社の懸賞論文に応募。英字新聞の論文募集に入選し、アメリカ留学の懸賞を得た。</p>	<p>兄儀平上京。</p>
		<p><応募論文>・経済学協会『不景気挽回策』・毎日新聞『内外雑居利害論』・英字新聞社『?』(懸賞は米国留学)</p>	
1885年	明治18年	<p>7/29付けの洋行許可書を受理し、わずかな旅費を工面してサンフランシスコに到着。ロシア系移民の家に住み込み英語を学び、皿洗い、煙草工場の職人などの賃金労働をしながら、資本主義経済の在り方を学んだ。又つぶさに幸福な家庭生活、夫人の尊重される社会を眺めてきた。報知新聞社長矢野龍溪が欧州旅行の帰途に立ち寄ったサンフランシスコで 知遇を得た。</p>	
1886年	明治19年	<p>実母の病重篤なるを聞いて 直ぐ3月に帰国。帰国後はいろいろな事業を興そうと計画し、奔走するも実現に至らず、不遇の日々が続く。</p>	<p>栃木の高等小学校に転校。弦斎は明治19年(1886年)知人の紹介で父惣八の生家大沢家に逗留。合戦場の小平家にもいたことがあるがこの間浪平は「文章軌範」の素読を教わる。これが弦斎(当時23歳)と浪平(当時12歳)の出会いである。</p>
1887年	明治20年	<p>8月末矢野龍溪から滝頭村で遊ぶ。報知新聞社入社を進められるも断る。</p>	<p>栃木協立英学校設立され通いだす。父惣八と日光二荒山(男体山)登山。惣八 敷地内で「鉛丹」製造開始。2年で失敗し撤退。</p>
1888年	明治21年	<p>実母3月亡くなる。報知新聞社の客員となる。又 東京専門学校(現・早稲田大学)に入学。</p>	<p>栃木の高等小学校に卒業、上京し東京英学校、数学を至誠学舎、漢学は蒲生重章から「史記」の個人教授を受ける。</p>
		<p><作品>日本乃時事に連載 処女作『加利保留尼亞』(自伝的FS小説)</p>	<p>兄儀平第一高等中学校合格。医者志望。</p>

		郵便報知新聞社に正式入社。矢野龍溪政界から身を引き、新聞社辞める。	浪平第一高等中学校不合格。父惣八急逝(48歳)。
1890年	明治23年	<作品>『匿名投書家』(日清、日露との未来戦記)	兄儀平第一高等中学校 青雲の志を捨て退学、家業の建直しを決意。栃木市内の四十一国立銀行に最下級事務員として勤めだす。浪平 第一高等中学校合格(受験者1,200名、合格者70名で7番で合格)。祖母輿志子死去
1892年	明治25年	<作品>『子猫』(SF的作品;米加戦争、女性の社会進出の強調)	『晃南日記』書き始める。はしがきは明治25年12月27日。「新緑の巻」は翌年1月の元旦より明治27年3月31日迄。
			10月2日;村井先生に書状を出す。「我れ嘗て今の弦斎居士村井寛先生の教えを受けし事あり。別れて既に六年、未だ一回も之を訪ふ事無なく、又書信の往復もなかりしが、思うに是我が過なりとは常に思いしも未だ音信れざりしが、益々長くなるのを恐れて、意を決して書を送りて無音を謝す。」10月5日;「村井氏より来状す、曰く来る遊べと」。
1893年	明治26年	<作品>『深山の美人』(一風変わったSF小説、ターザンの女性版)	10月8日;村井先生宅訪問「村井氏よりの来状草々其の居を訪はばやと、朝七時頃より出て行く。九時過ぎる頃、緒明横町なる先生の居に着きぬ。書生の案内に連れられて二階なる客間を通りて暫し待つ間、程なく先生入り来りて 先ず無音のお詫せばやと思うも、例の訥弁、思う半ばも謂ふを得ず。只だ先生が栃木は如何にと問えば かくなりと答え、日光の山を跋涉せしやと問われて 然りと答ふる。問われし事のみを答えて新に題を作りて話題を開く事 能はず。愚かな我れなりと自ら悟りぬ。去れど世故に長ずる先生なれば、何やかやと問ひつ語りつ 午食を饗せられ、程なく先生より 元来海を好み、小舟を棹して釣を垂るるなど最も楽しみとする所なり。今日は東風ふきて釣り如何はしき事なれど 試みに釣りを投ぜんと。余も大いに喜び共に小船に乗じて試みしも、思ふ様に得物なければ舷を廻して岸に上がり、別れを告げて四時三十分の汽車にて帰寮す。一別七年 相会して故事を談じ 往事を語り、未来を問ふて其の教えを乞う。心中 利する所 多し。
			『晃南日記』の「旅寝の巻」(明治27年4月1日より明治28年3月31日迄)。儀平結婚4月5日(お客160名、自宅での祝宴はPM7よりAM3まで)
1894年	明治27年	<作品>『写真館』(カラー写真の発明の話)	5月12日村井弦斎訪問;「幼き頃より何となく好む工学を修めんものと思えども、さて今日なりては何の工学を修め可きやは一問題なり。火薬面白からず 採鉱、冶金も覚束なし。造家、造兵とて吾が好む所にあらず。されば造船、化学応用、機械、電気などは其の志す内なれども、何れを選ぶやに至りては其の方法に苦しまざるを得ず。尤も独断にて為し得ざる理由なきも、未だ年も長ぜず志想も熟せず、殊に経験と言う一大要素を欠き居れば、なまじいに独断して失敗せんよりは、寧ろ何となく先輩の意見を叩くに如かず

		先に村井寛先生は古き知人にして、且つ世故に通じる人なれば其の意見を聞かばやと、学校の終わるや否や馬車に乗り、汽車に乗りて品川の寓居に訪ふ。先生幸いに家にありて其の意見を説き、今日の時勢と将来の気運及び我国利上 電気工学の必要を説き、世人の迷夢を覚破せざる可からざるを説けり。余も深くその説に感じ 且つ平常の素心なれば、其の意見に従ふ事となしぬ。談は四方山の話となり 運動の話となり、遂には射的、弓術など為して充分の歡を尽くして帰り、帰寮したるは午後六時なりき。
		9月12日村井弦齋先生を品川に訪ふ。
1895年 明治28年	<作品>『朝日桜』(日清戦争の再戦の未来戦記)	『晃南日記』「運動の巻」(明治28年4月1日より29年2月23日)
1896年 明治29年	<作品>『日の出嶋』連載開始(明治34年まで1200回)。	東京帝国大学工科電気工学科入学。
1897年 明治30年	<作品>『芙蓉峰』(富士山頂に巨大サーチライトを設置して関東一円を明るくする)。	「晃南生死す」落第
1898年 明治31年	報知新聞編集主幹。	『続晃南日記』再スタート。・夏北海道行き(7/13～8/17; 沖繩丸に乗船し津軽海峡、噴火湾、国後海峡の電線敷設工事)。・9月; 鎌倉に村井先生を訪ね 夫人と共に3人で逗子、葉山に遊ぶ。
	<作品>『町医者』(瘧治療の医学テーマSF)	兄嫁の離縁は「重大な出来事なりし」。
		【歳暮感】我国の工業振はざれば、之を振はしむるは吾人の任務にして、決して吾人は会社の番人を以て終るべきものに非ざるを深く感じたり。
		5/27『続晃南日記』終了
1900年 明治33年	『食道楽』の執筆前後、弦齋は、大隈重信の従兄弟の娘である尾崎多嘉子と結婚。また、彼女の母親の妹は、後藤象二郎の後妻であった。女性登山家の草分けとなった村井米子は娘。	7月浪平大学卒業(26歳) 9月藤田組小坂鉦山入社
1901年 明治34年	『二十世紀の豫言』(にじっせいきのよげん、二十世紀の予言)は、『報知新聞』が1901年(明治34年)1月2日と3日の2日にわたって同紙紙面に掲載した未来予測記事の題名である。記事は、電気通信、運輸、軍事、医療、防災などの23項目について、20世紀に実現するであろう科学・技術の内容を予測。	兄儀平、ノブと再婚(阿蘇郡葛生町 父新井金平、母ラクの四女、明治15年9月生まれ)

1903年	明治36年	代表作は、報知新聞に1903年(明治36年)1月から12月まで連載された『百道楽シリーズ』で、『酒道楽』『釣道楽』『女道楽』『食道楽』が執筆された。他にも、玉突道楽、芝居道楽、囲碁道楽など案はあったようであるが、執筆したのは4作だけである。これらの作品は、食道楽の様な道楽にうつつを抜かず遊興の徒を描いたものではなく、その様な道楽をたしなめ、飲酒の健康被害を語り、正妻以外に愛人をかこう旧来の悪弊を糾弾する教訓・啓蒙小説である。	
		その中の『食道楽』(くいどうらく)は、明治時代、徳富蘆花の『不如帰』と並んで最もよく読まれ、小説でありながら、その筋のあちこちに600種以上の四季折々の料理や食材の話題が盛り込まれており、『美味しんぼ』や『クッキングパパ』などのグルメコミックの先駆けともいべき作品である。ベストセラー作品として文学史的な評価も高い。また、「小児には徳育よりも、智育よりも、躰育よりも、食育が先き。躰育、徳育の根元も食育にある。」と食育という用語を記述した。	
1904年	明治37年	神奈川県平塚市の平塚駅の南側に居住。広さ1万数千坪。	1月;小坂鉦山辞し、東京本郷に住む。5月結婚 広島水力電気入社。
		結婚後、1904年から亡くなるまで神奈川県平塚市の平塚駅の南側に居住した。『食道楽』の印税で屋敷の広大な敷地に和洋の野菜畑、カキ、ビワ、イチジクなどの果樹園、温室、鶏、ヤギ、ウサギなどの飼育施設、果ては厩舎を築造し、新鮮な食材を自給した。当時は珍しかったイチゴやアスパラガスの栽培まで行った。また各界の著名人を招待したり、著名な料理人や食品会社の試作品などが届けられるという美食の殿堂のように取りざたされる優雅な暮らしを営んだ。ただし、彼は一連の『食道楽』ものを終了した後に断筆、報知新聞をも辞職してしまう。その後、脚気治療のために玄米食の研究に没頭し、また断食、自然食を実践した。また、自ら竪穴住居に住み、生きた虫など、加工しない自然のままのものだけを食べて暮らし、奇人、変人扱いされた。	5月;東京電燈入社。久原 日立鉦山開業。 7月;渋沢元治と猿橋「大黒屋会談」 10月;日立鉦山入社
1910年			11月;日立製作所創業。
1912年	大正元年		弦齋夫妻 日立鉦山見学
1927年	昭和2年	平塚の自宅で没する。享年64歳。墓は鶴見の曹洞宗総持寺。	兄儀平第一銀行栃木支店長に昇格
			弦齋より別荘地5000坪購入。70坪新築。
			1月31日;「勤勉と誠実を主義主張」とし弟浪平の”立身”を見守っていた兄儀平病没
			7月;平塚別荘焼失。
			弦齋未亡人多嘉子 小平浪平宅訪問。
1951年	昭和26年		10月;自宅で没 享年77歳